



TITLE:

花山だより(十一月)

AUTHOR(S):

星見山人

CITATION:

星見山人. 花山だより(十一月). 天界 1934, 15(165): 107-107

ISSUE DATE:

1934-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166938>

RIGHT:

花 山 だ よ り (十一月)

例に依つて今年も獅子座流星観測は賑々しく計劃された。即ち二ヶ所に観測隊が出張するのであつて、先づ臺長自らは高城、草場兩氏を伴はれて生駒山に出馬される。別動隊と言つた形で公文、堀井、龜井の三氏が南紀田邊の本學臨海實驗所へ出張される。あとは花山に残つて留守部隊と言ふ陣容。天氣がよかつたので何處も好成績を挙げ得た事は幸ひであつたが、流星出現数は淋しい方で、「獅子座流星群は種切れになつた」と言ふ山本臺長の説は確められた様である。尚ほ、17日朝出現した大火球は此の流星群には屬してゐないのであるが、各地でよく観測され報告が集まりつゝあるので、柴田先生がその實際の行路や輻射點等研究中である。今月は中旬丈よく晴れたので流星観測には甚だ都合がよかつたのであるが、最後に不幸な事が起きた。それは田邊からの歸途、龜井氏が右指に重傷を受けた事で誠に御氣の毒に耐えない、其の後暫らくの間は右手を頸から吊つて、左手を器用に働かせる同氏の痛々しい姿が続いた。

山本臺長は北海道の旅を終へて6日歸洛され、15日からは生駒山へ流星観測へ、その途中17日晝間丈歸臺されて、本會の例會に保井春海の天文學に就いて講演されて再び生駒へ、20日は姫路、21日は舞鶴、24日は倉敷天文臺の創立記念日へ、25日からは草津の農學校經緯度観測へと、文字通り東奔西走、席の暖まる暇間もない御忙がしさである。又來月12日からは、日本學術協會第10回總會に出席のため、臺灣へ出張される豫定である。

東京の早乙女臺長が22日に、風害後初めて花山を訪問せられた。本會の會計監督池田氏が本月、檢定試験に見事パスして植物學の高校教授たる資格を得られた事は御目出度く、一同と共に御祝申上ぐる次第である。10日頃から新聞で有名になつた草場氏が教室の方へ通はれる様になり、今後もつと立派な星圖を完成する筈である。南天の巨嘴星座に因む巨嘴鳥が、南米支部から22日に送られて來た。誠に巨嘴たるに違はぬ、又綺麗な色の嘴でもある。28日に大ドーム修理用足場の上部を一時取り除く事にしたので、やつと東天の観測が可能となつた。(星見山人)